

はじめに

仏教は紀元前 560 年ごろ、インドで生まれました。偉大な聖人ブッダ^{しやくそん}釈尊の姿は、同時代においては人には再現できないものと思われていました。そのため人々は聖人を暗示するものを信仰の対象としていました。しかし聖人がこの世から去って永く時がたつとその教えを正しく伝えていくことが困難になっていきます。何とか正しい教えを伝えようと仏教の信仰のために作られるようになった彫像や画像、それが仏像です。なお聖人が視覚化されていくこの過程は、多くの他の宗教にも共通するものでもあります。

現在、仏像は 1 世紀頃からインドで作られるようになったと考えられています。それが日本で行われるようになったのは 6 世紀末頃のことです。信濃国の仏教信仰は、飛鳥後期^{あすか}(7 世紀後半)頃からとされており、仏像制作もこの頃始まったと考えられています。そして今から約 800 年前の鎌倉時代には、靈驗^{れいげん}仏への信仰が高まり、それと同じ姿をした像が同じ靈驗^{りやく}や利益をもたらしてくれると信じられ、靈驗^{ほんぞん}あらたかな寺の本尊をまねた模像^{もぞう}を作ることが盛んになりました。善光寺信仰の中心である秘仏^{あみださんぜんぞう}本尊阿弥陀三尊像^{ぜんこうじしき}をまねた善光寺式三尊像^{さんぜんぞう}もこのような経緯で作られるようになります。現在、善光寺式三尊像は、関東・東北地方を中心として、全国各地に二百数十例知られています。本展では善光寺御開帳^{ほとけ}に併せて、善光寺信仰と“仏の像”について考えていきます。

第一会場 善光寺信仰の広まり この会場では、善光寺信仰の広まりをご覧ください。

14 遊行上人縁起^{ゆぎょうしやうにんえんぎえ} 京都・金蓮寺^{こんれんじ} 室町時代 (5/3 (日) より展示)

*頭の番号は、展示室内の作品番号を示しています。

鎌倉時代には、高名な僧侶の伝記を題材にした絵巻物が多く作られました。その代表的なものに、時宗^{じしゅう}の開祖、一遍上人^{いっぺんしやうにん}の伝記を描いたものがあります。一遍は念仏を唱えるだけで全ての人が救われるという教えを説き、各地を巡る中で 2 度善光寺を訪れました。一遍の志を継ぎ、布教や修行のために各地を巡り歩^{ゆぎょう}く「遊行上人」を代々相続する人を「遊行上人」といいますが、この絵巻には、一遍の意志を継いだ遊行上人である他阿一行が善光寺を訪れ、生前善光寺を訪れた師を偲び、念仏を行う場面が描かれています。遊行上人縁起絵の原本は失われていますが、約 20 の模本が伝えられており、これはそのうちのひとつです。

17 善光寺縁起^{えいしやうじ} 神奈川・英勝寺 江戸前期

縁起は寺社の起源や由来を伝えるもので、必ずしも史実を正確に伝えるものではありませんが、社寺の信仰を広めるために大きな役割を担ってきました。本作品は、多数制作された善光寺縁起の中でも、全五巻の絵巻形式で伝えられる唯一のものです。

第二会場

この会場では、左より順に、①古い仏像と善光寺式三尊像の間に共通するかたち、②代表的な靈驗^{れいげん}仏、③全国に残された善光寺式三尊像、④善光寺に籍を持った仏師のテーマに分けた作品をご覧ください。

◆善光寺の本尊 阿弥陀三尊像

善光寺縁起によると、本尊の阿弥陀三尊像は、6世紀に仏教とともに百済から伝えられたとされています。その本尊は秘仏中の秘仏なので、誰もみることができません。しかし、その本尊を忠実に再現して鎌倉時代に作られたといわれる前立本尊が、数え年で7年に1度、御開帳されています。

◆善光寺式三尊像の特徴

大きな特徴としては、「一光三尊形式」といわれる1つの光背の中に中尊と両脇侍の3体の像からなる全体の形と、「印相」とよばれる手の形があげられます。中央の像の手の形に注目してみると、その印相は、右手は「パー」の形の施無畏印、左手は「チョキ」を下にむけた形の刀印になっています。普通、施無畏印には形は同じ「パー」のままで、手の上下を逆にした与願印が組み合わせられることが多く、刀印の組み合わせは珍しいものです。そのため、中尊のみしか残っていない場合であっても、この印相から善光寺式三尊像の形式を踏まえた仏像かどうかを知ることができます。

◆この会場で見られる代表的な印相があらわすこと◆

施無畏印	さまざまな恐怖を取り除いてくれることを表しています。
刀印	一説には刀を表し、悪いものを追い払ってくれるといわれています。
梵篋印	胸の前で左の掌に右の掌を重ね合わせる珍しい印相で、善光寺式三尊像の脇侍の特徴といえます。その掌の中には真珠の薬箱があるといわれています。
与願印	仏が人々の願いをかなえてくれることを表します。

* 第3会場奥に仏像を説明したパネルがあります。併せてご参照下さい。

●古い仏像と善光寺式三尊像の間に共通するかたち

1 三尊仏立像 静岡・浜松市美術館 北魏時代 *北魏 古代中国に起こった国のひとつ。

一光三尊形式の仏像は、今から約1500~1600年前の北魏時代によく作られました。善光寺式三尊像はこの古い様式によって作られています。光背は聖人の体から発せられる光を表すもので、多くの像の制作者が知恵を絞った部分でした。光背に刻まれた奏楽天人などの美しく繊細な造形にご注目下さい。

2 如来立像 兵庫・(財)広岡コレクション記念財団

善光寺式三尊像の中尊と同じ、施無畏印、刀印を持つ如来像です。この印相の組み合わせは日本では飛鳥時代頃の仏像に特徴的なもので、やはり善光寺式三尊像が古い様式によって作られていることを示しています。

6 菩薩立像 上田市・長福寺 / 7 菩薩立像 愛知・修法寺

2つの像は共に右手に水瓶を持っています。水瓶は汚れを払う霊水が入っている仏具で、菩薩が持つ物です。微笑みをたたえるような柔和な面相、丸みをおびた姿は、7世紀後半の金銅仏の特徴をよく表しています。また裳の折り返し、蝶結びの紐などの細部が似ていることから、このふたつの像は同じ像を元にして制作されたと考えられています。

* 金銅仏 鑄造による銅製の仏像の表面に鍍金をして金色に仕上げたもの。

●代表的な靈驗仏

*靈驗仏 ある特定の由緒を持った靈驗あらたかな仏像のこと。

10 釈迦如来立像 小布施町・玄照寺

京都、清凉寺の釈迦如来像をまねて作られたものです。清凉寺像はインドでウダヤナ王がブツダ釈尊を慕い初めて造立したという像の模像で、仏そのものが我々の眼の前に現われ利益を施すという生身仏信仰の高まりとともに、鎌倉時代に多くの模像が作られるようになりました。縄状に巻いた頭髪や文様化された流水状の衣紋がその特徴を良く表しています。11の千手観音立像は、京都の清水寺の本尊を模して作られた靈驗仏の例であり、参考写真1は、奈良の長谷寺の本尊十一面観音像の特徴を表す靈驗仏です。

12 阿弥陀如来立像（黒本尊） 飯山市・忠恩寺 鎌倉時代

生身仏信仰の高まりは、鎌倉時代の特色のひとつです。像の制作者たちはこれに応えようと生身仏に備わるという32の特徴を表す工夫をしました。口をわずかに開けて歯を見せるこの歯吹阿弥陀もその工夫のひとつです。この他に頭頂が盛り上がっている、手の指の間に水掻きがあるなど様々な表現があります。

●全国に残る善光寺式三尊像

善光寺式三尊像は、基本は同じ形です。しかし、たくさん見比べると、微妙に違うことに気づきます。ここではその微妙な違いを見つけて楽しんで下さい。また逆に、中にはよく似たものもあります。似た像を探してみてもおもしろいでしょう。微妙にちがったり、同じのがあったり。このことは、作られた場所や時代や発願主、作者の違いが微妙に像に反映しているからです。像に託された人々の思いを感じ取りながらご覧下さい。

21 阿弥陀如来立像 滋賀・善水寺 鎌倉時代

この像の背面には、善光寺本尊を写して作られたことを記す銘があります。銘が記される善光寺式三尊像のうちでは、甲斐善光寺の本尊に次ぐ古い作例で、台座や右手の形などがその特徴をよく示しています。しかし髪を清凉寺式のように縄状にしていることや、左手は与願印を結んでいることなど典型的な善光寺式三尊像の特徴とは異なる表現もみられます。

22 阿弥陀三尊像 福島・いわき市 鎌倉時代 / 23 阿弥陀三尊像 滋賀・園城寺

ともに光背、台座部までも制作当初のものを残している貴重な作例です。一光三尊の形式、印相の他に、上下が反対になった蓮の花形の台座に乗っていること、両脇侍が冠を頂き、梵篋印を結んでいることなど、善光寺式三尊像の特徴をよく表しています。

26 阿弥陀三尊像 千葉・修徳院 / 28 阿弥陀如来立像 茨城・弘経寺 共に鎌倉時代

26の中尊(阿弥陀像)と28の像を見比べて下さい。両肩にかかる衣、襟元に內衣をのぞかせ、腹部より下の衣文がU字型の曲線をはっきり繰り返す点などがよく似ており、時代はやや異なるものの同じ工房で作られたものと推定されています。

31 阿弥陀三尊像 滋賀・新善光寺 鎌倉時代

秘仏として伝わり、昨年の秋に公開されたばかりの像です。脇侍は30の神奈川県茅ヶ崎市宝生寺の像によく似ており、善光寺信仰の全国的な広がりを考える上で興味深い作例です。

43 阿弥陀三尊像(石造十三重塔納入品) 個人蔵 / 45 阿弥陀如来立像 三重・龍光寺 共に鎌倉時代

善光寺式三尊像は、元となる善光寺の本尊が絶対秘仏であったため、模像にもさまざまなバリエーションがあります。典型的な像の大きさは中尊一尺五寸(45.5cm)、脇侍一尺(30.3cm)ですが、43の三尊像の

ように小さなものも残されています。小さな作の中に七つの化仏^{けぶつ}をいただく光背など、精緻な作りにご注目下さい。一方 45 の阿弥陀如来立像は、像高が 127.6cm と大型の作例です。これは善光寺縁起の中にお告げを受けて大きな仏像を作った逸話にならうものと考えられます。

* 化仏 如来が衆生を救う為に姿を変えて現れたもの。

●善光寺仏師

51 金剛力士像（阿形・吽形）^{こんごうりきしぞう あぎょう うんぎょう} 波田町^{はたまち} 鎌倉時代

波田町の仁王堂に祀られる像で、善光寺に籍を置いた仏師、妙海^{みょうかい}の作と伝えられています。妙海は長野県下に5件9軀の仏像を残していますが、それらは全て 100cm 前後の大きさのものです。本像は 250cm を越える大作であり、妙海がこれだけの大作も作ることのできる技量の高い仏師であったことがわかります。

52 日光・月光菩薩立像^{にっこう げっこう} 安曇野市・光久寺^{こうきゅうじ} 鎌倉時代

残された墨書の銘から、妙海が51の金剛力士像の5年前^{ぶんぽう}（文保元（1317）年）に制作したことがわかっており、現存する妙海^{みょうかい}の最古の作品です。高く結われた髻^{もどり}、左右が連続した眉に特徴があり、うねりの強い煩雑な衣紋表現や生身の人間を思わせる顔立ちにご注目下さい。

第三会場

この会場では、東大寺^{とうだいじ}俊乘堂^{しゅんじやうどう}（奈良）に安置されている快慶^{かいけい}作の阿弥陀如来立像と、ドイツのリンデン民族学博物館（シュトゥットガルト）に所蔵されている阿弥陀三尊像がご覧になれます。

20 阿弥陀三尊像^{あみださんぞんざう} ドイツ・リンデン民族学博物館 鎌倉時代

この像については、今のところ、1984年にリンデン歴史民族学博物館が、ハリー・パッカード氏（アメリカ人の日本美術収集家）から購入したということが分かっているだけです。銅による鑄造の体軀に、朱漆、黒漆を重ね、さらに金箔が押されています。細身な体軀、童顔でややつり上がった目、鉢のはった頭の形、螺髪の数などは善光寺の前立本尊とよく似ており、衣紋の構成やその彫り口、姿勢などに異なる部分もみられますが、原像をおなじくする双子の像と考えられます。

19 阿弥陀如来立像^{あみだにょらいたつぞう} 奈良・東大寺^{とうだいじ しゅんじやうどう}（俊乘堂^{しゅんじやうどう}所在）^{かいけい} 鎌倉時代 快慶作

『東大寺諸集』によると、この像は東大寺再建に大きな貢献をした俊乘坊重源^{しゅんじやうぼうちゆうげん}が弟子の快慶に作らせたものです。重源は中国の文物にも精通した高僧で、善光寺には二度訪れたことが知られています。快慶は運慶と並び、鎌倉時代を代表する仏師のひとりです。本像は快慶が得意とした像高三尺（90cm 程度）の典型的な作品で、また善光寺信仰を支えた当時の阿弥陀信仰の最も本格的な造形です。整った美しい形や台座の力強さなどもみどころですが、この像の示すなまめかしさには際だつものがあります。拝む人はここに生身の阿弥陀の出現を見たのです。なお善光寺には、快慶の作に近い阿弥陀如来像が伝えられており、今回の御開帳期間中、善光寺史料館でみることが出来ます。